様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０８５

研究課題名（和文）口語英語コーパスを利用した会話の相互行為的言語現象の研究と教科書教材への応用

研究課題名（英文）A Study of Interactional Linguistic Features of Conversation Using English Spoken Corpora and Its Application to English Textbooks

研究代表者
山崎　のぞみ（Yamasaki, Nozomi）

関西外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：４０３６８２７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、口語英語コーパスを利用して会話の相互行為的言語現象（話順交替を含む発話の即興的やりとりに関わる語彙や文法）、特に、並列的に使われるbecause節の談話機能や、別の話者による統語単位（副詞節）の拡張について調査し、それらの使用が、話者同士の即興的な話順交替や協同的談話構築に深く関わっていること示した。さらに、会話の相互行為的な側面に対する学習者の意識を高める教材として話し言葉コーパスが持つ可能性を探り、コーパスの会話を、現実の言語使用の実態に意識を向けさせる観察材料として利用する方法を提案した。

研究成果の概要（英文）：This research described some of the interactional linguistic features of conversation using English spoken corpora. The corpus-based investigation included the use of paratactic because-clauses and expansion of syntactic units started by other speakers, and showed how those linguistic phenomena are closely related to the immediacy and real-time processing of conversation and its interpersonal, co-constructional aspects. The study also explored the potential of spoken corpora for raising awareness of the reality of language use in conversation among learners of English. It claimed that English spoken corpora, if used as observation objects, contribute to the teaching of authentic spoken English, including such linguistic features as may be motivated by turn-taking and turn-yielding.

研究分野：談話分析、コーパス言語学

キーワード：口語英語コーパス　相互行為　会話分析　話順交替　協同発話　リスナーシップ　英語教材　モデル会話

## １．研究開始当初の背景

私はこれまで、英語の話し言葉コーパス、主に British National Corpus (BNC) や International Corpus of English: The British Component (ICE-GB)の話し言葉部分を用いて、会話という動的な相互作用の中で語彙や文法がどのように話者交替システムという相互行為の組織に関わっているかを研究してきた。このような研究は、90 年代半ば以降、口語英語コーパス編纂が急速に進んだ背景がある。詳しい話者情報、笑いやポーズなどの非言語的音声情報、発話のオーバーラップ（重複）などの談話構造的な情報の付与も進み、それに伴い話し言葉の相互行為的言語現象を調べることが可能となった。

さらに私は、平成 25 年度より実施の新学習指導要領に対応して発刊された高等学校用英語教科書の編纂にかかわる中で、教科書のモデル会話と、即興的である意味無秩序な日常会話との乖離に懸念を抱いていた。この乖離は、英語が話せるようにならないという英語教育への批判の一因であるとも考えられる。そこで私は、私のこれまでの「会話の相互行為的な言語現象の研究」をさらに発展させ、研究成果を英語教育、特に教科書教材に応用することを模索したいという考えに至った。

## ２．研究の目的

(1) 書き言葉には見られない、話し言葉の相互行為的言語現象（言い淀みや言い直しなどの非流ちょう性の言語現象や、話順交替を含む発話の即興的なやりとりに関わる言語現象）の記述を進める。具体的には、口語英語コーパスを用いた分析や言語学・談話分析・会話分析分野の文献調査を通して、相互行為的言語現象が話者交替システムのどのような場所で生起し、どのような機能を果たしているかを調べる。また、英語教科書のモデル会話や例文を調べ、言語の相互行為的・対人関係的側面がどの程度、教科書の言語に反映されているかを調査する。

(2) (1)で明らかにされた言語事実と、教科書の言語調査結果を照らし合わせ、教科書の言語に組み込むべき語彙・文法を提案し、モデル会話例や、問題例、タスク例を作成・発表する。

## ３．研究の方法

(1) 口語英語コーパスの有効利用のため、最新の話し言葉コーパスや検索ソフト情報を入手し、関連書籍、コーパス関連サイト、ICAME (International Computer Archive of Modern English) や国際コーパス言語学会 (International Conference on Corpus Linguistics) などの学術誌、国内の英語コーパス学会への出席を通して、コーパスに関する最新知見の集積に努める。

(2) 会話の相互行為的言語現象のうち調査対象を選択し、コーパスを利用してその現象に典型的な語彙・文法パターンを見つけ、話者交替システムとどのように関わっているかをコンテクストの様々な要素との関連で説明する。量的・質的分析を通してこれまで明らかにされていない用法や機能の分析・記述を試みる。先行文献は、談話分析、会話分析、語用論、やりとりの社会言語学、ことばの民族誌、コーパス言語学などの関連分野に目配りする。

(3) 高等学校新課程用に発行された主要な英語の教科書を入手し、リアルタイムな談話構築を表す諸特徴がどの程度、教科書の言語に使用されているかを調査する。海外の英語教材も参考にする。

## ４．研究成果

(1) 副詞節の一つである *because* 節を取り上げ、会話における相互行為の観点からその機能を記述する論文を執筆した。*because* 節には書き言葉には見られないような話し言葉に特徴的な使用法がある。話し言葉における *because* 節は、従属節として節の埋め込み関係を示すというより、先行する発話を並列的に補足したり、詳述したり、具体化したりする使用法が多い。このような並列的 *because* 節を話し言葉コーパスから抽出し、話順交替を含む会話のやりとりの中で *because* 節が生起するパターンを見出し、そこに見られる談話構築上の働きを論じた。

使用したコーパスは ICE-GB (International Corpus of English: Great Britain)である。自然発生的な日常会話を見るため、dialogue: private というカテゴリーに入っている会話を検索対象とした。抽出した並列的 *because* 節を、話順交替・談話構造的な環境から以下のように分類した（CL1 は主節に相当する節、CL2 は *because* が導く節を指す）。

Ⅰ. Same speaker（隣接している）
A: _____(CL1)_____ *because* CL2_____

Ⅱ. Same speaker（隣接していない）
A: _____(CL1)_____
B: _____
A: *because* CL2_____

Ⅲ. Different speaker（異なる話者が協同で）
A: _____(CL1)_____
B: *because* CL2_____

分析の結果、主節（CL1）と *because* 節が同一話者のターンの中で連続して現れる場合（パターンⅠ）は、*because* 節はターンの維持や発話の仕切り直し・自己修復をマークすることが多い一方で、相手の無反応によってターンの拡張を迫られて生じることもあった。CL1 と *because* 節の間に他の話者の発

話が挿入される場合（パターンⅡ）は、相づち的な短い応答に促される形で *because* 節による発話継続が行われることがある一方で、話者にターンの拡張を迫るようなタイプの相手の反応（驚きや疑いなど）によって *because* 節が生起することも指摘した。別の話者が *because* 節を付け加えるタイプのパターンⅢは、協同発話の言語現象の一種であり、話者同士が協同的に談話を構築する側面を表面化し、話者間の連帯感や収斂を促す効果がある。一方で、対立的な議論や意見の相違が起こっている会話におけるパターンⅡ・Ⅲの *because* 節は、論点の主張や反駁、競合的なターンの獲得・継続と密接に関わっていることを示した。以上の結果は、文に構造的に統合されていない並列的な *because* 節が、相手の反応に応じて即興的に行うターンの維持・獲得・拡張などのマネジメントや談話構築に深く関わっていることを裏付けるものである。

(2) 会話者同士が協同で、相互に影響を及ぼし合いながら談話を構築していることを表す言語現象である「協同発話」(co-construction) に着目した論文を執筆した。先の発話が統語的に完了していても、後の話者が、先の発話の統語的続きとして可能な発話を行う場合ある。統語的に完了した先の発話を後の話者が拡張する（付け足す）という手続きである。この「別の話者による統語単位の拡張」は、統語的に義務的な要素ではない修飾語句・節、例えば以下のような従属副詞節が使われる。

A: So I turned round and chased after him.
B: **Just as** I would have done.
(Carter and McCarthy 2006: 171)

別の話者による統語的拡張は、会話における「リスナーシップ」（聞き手としての役割）の観点から見ると興味深い。統語単位の拡張は、先のターンの一部と扱われるのか、それとも新たなターンとみなされるのかという疑問が沸く。また、先の話者は、後の話者の拡張を承認・拒否する（*Yeah, That's right.*などで）権限や義務はあるのかどうかという問題もある。本稿では、統語単位の拡張という協同発話が、聞き手としての役割や話順交替とどのように関連しているのかということを考察し、それが拡張する副詞節のタイプによって異なるのかどうかということの分析も試みた。

本研究では、別の話者による統語単位の拡張として、直前の文・節を先行詞とする非制限用法の *which* 節と、*if* 節、*because* 節の３種類に焦点を当てた。収集するデータは以下のような話順形式をとるものである。

A: _____
B: ***which*** / ***if*** / ***because*** _____
A/B: _____

調査は、ICE-GB (International Corpus of English: Great Britain) というコーパスの dialogue: private のカテゴリー内の会話を使用した。

コーパスからデータ収集した結果、これらの節が聞き手による拡張として使われる頻度は予想通り低く、違いを一般化するには及ばなかった。しかし、わずかな例の観察からではあるが、それぞれの節の特徴が見てとれた。相づちのように、ターンを取り戻す意図のない聞き手としての反応を示す割合は、*if* 節、*because* 節が高かった。また *if* 節は、その限定・条件づけが先の話者の談話進行に影響をもたらすためか、先の話者による承認・否認を受けやすい傾向がある。一方 *because* 節は、先の話者に確認を求める場合を除いて、*if* 節ほど先の話者からの承認・否認を伴わない傾向があった。さらに、聞き手が予測して話者と同時に *because* 節を発する同時発話が見られるのも特徴的だった。聞き手として協同的に談話を構築するといっても、その実現の仕方は副詞節のタイプによって異なることが分かった。他の拡張形式も調査することが今後の課題である。

会話におけるリスナーシップの重要性の認識が進み、最近では英語教育への応用の試みも見られる。聞き手としてのふるまい方を、英語学習の初期に学ばせる重要性も主張されている。一般的な相づちだけではなく、本稿で扱ったような統語単位の拡張形式もリスナーシップの実現に大きく関わっており、聞き手の言語的ふるまいの研究結果が教育分野で応用されることが期待される。

(3) 『英語の話し言葉コーパスの教育的応用―会話の相互行為的言語現象に着目して―』と題する論文を執筆し、話し言葉コーパスの教育的利用について考察した。英語の話し言葉コーパスを英語教育に応用する様々な方法や問題点を模索し、特に、自然発生的な会話に特徴的な相互行為的特徴（言い淀みや言い直しなどの非流ちょう性の言語現象や、話順交替を含む発話の即興的なやりとりに関わる言語現象）への意識を高める教材として話し言葉コーパスが持つ可能性を探った。

さらに、話順交替に関わる相互行為的言語現象を学習者に示す方法として、話し言葉コーパスからある一定の長さの連続した会話を編集なしでそのまま用いる方法を提案した。着目させる点として例示したのは、「文法的に不完全な発話」「発話のオーバーラップ（重複）」、「話し言葉の通常の非流ちょう性の特徴」「聞き手の反応の仕方」である。これは、教材用に創作されることが通常のモデル会話が持つような産出（模倣）の模範として役割をコーパスに担わせるのではなく、現実の言語使用の実態に意識を向けさせるための観察材料としてコーパスを利用する方法である。このような方法は、教材に通常

載っている、程度の差はあれ創作されたモデル会話の必要性を否定するものではない。新出の表現や文法項目を効率よく提示し、会話をその通りに模倣させて習得させるモデル会話は、会話を扱う教材には欠くことのできないものである。また、*well, I mean* などの談話標識や発話末につける付加疑問といったような話し言葉に特有の表現形式の使い方や機能を学ぶ場合は、DDL（データ駆動型学習）のようにコーパスの多数の例を KWIC (Key Word in Context) コンコーダンス形式で観察することによって表現の意味や働きを類推して導き出す活動も効果的であろう。

提案した方法は、創作モデル会話の目的とも DDL のようなコーパスの使い方とも異なり、ある程度の長さのコーパス会話をそのまま学習者に提示することによって、会話の相互行為的な側面を反映した言語現象に意識を向けさせる使い方である。

コーパスの会話を未編集で用いる利点は、公開されている場合に限るが現実の会話の音声を聞かせることができる点である。教材用に部分的にでも会話に編集を加えると、音声を準備する場合はナレーターによる吹き込みでしか対応できない。ドラマや劇の会話とも異なる、実際の会話の無秩序で乱脈な実態に触れるには、やはり会話コーパスをそのまま用いるのが最適である。教室でこのような使い方をする場合、注意すべき点は、会話の内容が理解しづらくても気にさせず、モデル会話のようにペアワークなどで模倣させないことである。あくまで、自然な会話が話者同士の即興的で相互行為的なやりとりによって成り立っており、整然とした書き言葉テキストとは異なることに気づかせる目的で使う。このような目的の利用には学習者のレベルをそれほど問わない長所がある。さらに、動的な会話のやりとりに対して学習者に気づきをもたらし、言語学習への動機付けを与える上、書き言葉のように文法的に完全に「正しい」文をよどみなく発せねばならないというプレッシャーから学習者を解放するという効果も期待できる。

本稿で提案したようなコーパスの使い方には、DDL のようなコーパスの直接的利用に対して指摘される問題点と同様に、完結した「プロダクト」としての会話を扱うために、実際に学習者に産出させて運用能力を高めるような「プロセス」の活動に結びついていないという課題がある。しかし、まさにその「プロセス」の仕組みを一歩離れたところから観察することによって気づかせる作業は、英語やそれ以外の言語を学ぶ中で取り組む全ての言語活動の基盤となるのではないだろうか。話し言葉への意識を高める意味では、母語である日本語の会話コーパスを併用することによっても、英語の相互行為的言語現象をより実感につなげることができると思われる。生の会話をじっくりと観察することは現実世界では不可能に近いが、コーパスを用いれば可能であり、教室内での利用方法に大きな可能性があると考える。

(4) 得られた成果の位置づけとインパクト

会話における相互行為的言語使用の分析は少数のテキストを質的に分析する手法が伝統的だったが、話し言葉コーパスを使用した量的アプローチを組み入れることで証拠を多く出すに留まらない会話の新たな側面を明らかにできる。本研究は、話し言葉コーパスを利用して会話の相互行為的言語特徴を調査し、書き言葉を基準にした文法を前提に論じるだけでは説明のつかない、即興的な会話に特徴的な言語使用実態の一側面を明らかにした。さらに、このような研究成果を英語教育に応用することを試みることで、従来の書き言葉中心の学習者文法にも一石を投じ、英語教育・談話研究・コーパス言語学の連携の進展に多少寄与することができたと考える。

(5) 今後の展望

上記の研究成果(1)(2)は、話者が文法的な言語リソースを共有しながら即興的に談話構築を行っていることを示したが、扱った文法は *because* 節、*which* 節、*if* 節といった副詞節に限定していた。今後は、即興的なやりとりに関わる言語現象のうち他の文法面、さらには話者間による語彙の共有にも視野を広げていくつもりである。

英語教育・教科書への応用に関しては、(3)の研究においてモデル会話の役割・意義を考察する際に高等学校用検定教科書を利用したが、コーパス調査結果に基づいて会話の相互行為的・対人的言語面を教材に応用する試みは、海外（特にイギリス）の英語教材が進んでいることが分かった。今後は、そのような出版物も収集し、話し言葉コーパスを外国語学習や教材へ応用するさらなる方法を模索していきたいと考えている。

<引用文献>

Carter, R. and McCarthy, M. (2006) *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide: Spoken and Written English Grammar and Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① <u>山崎　のぞみ</u>、会話における *because* 節の相互行為的機能、現代英語談話会論集、査読有、第９号、2014、pp. 25－47

② <u>山崎　のぞみ</u>、英語の話し言葉コーパスの教育的応用―会話の相互行為的言語現象に着目して―、関西外国語大学研究論集、査読有、第 101 号、2015、pp. 21－

③ 山崎　のぞみ、リスナーシップの観点から見た協同発話―聞き手による統語単位の拡張―、現代英語談話会論集、査読有、第 10 号、2015 年３月（印刷中）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山崎　のぞみ（YAMASAKI, Nozomi）
関西外国語学部・外国語学部・准教授
研究者番号：　４０３６８２７０